

シンポジウム 15：在宅医療の希望を叶えるための退院支援のあり方

演題名	都市部特定機能病院での退院支援の実際
------------	--------------------

概要

「病院を退院すること」が医療の必要性の低下を意味せず、医療の継続を必要としながら「退院する日」を迎える人々が増加してきました。医療の機能分化は進み、一医療機関完結型の医療から複数の医療機関が関わる地域完結型医療へと地域医療システムは変遷を遂げつつあります。それぞれの医療機関は、診療報酬改定の示す流れに敏感に反応しながら、地域の中に各々の医療機関の機能をどう位置づけるかに苦心して来ました。「住み慣れた地域で最期まで」のスローガンのもと、地域包括ケアの制度化が進む中で、それぞれの地域で様々な工夫をしながらの臨床実践が展開されています。しかし、それを支える医療・福祉のインフラは偏在や不足が言われており、特に都市部においては「療養」や「看取り」の「場」の不足が指摘され深刻な問題となっています。

病院のソーシャルワーカーは伝統的に社会福祉の立場から、退院支援の関わりを行って来た職種ですが、現在の退院支援は量的にも質的にも医療職種との協働なくしては成り立たなくなってきました。経済的問題や虐待対策、後見人制度の活用など社会福祉的な対応を必要とする社会的な多問題を抱える退院支援事例も減ってはいません。これらの問題に短期間に対応し、次の療養の場へ繋げて行く都市部の急性期病院では、多職種が協働して行う退院支援は必要不可欠なものとなっています。本報告では、都市部に置ける退院支援の背景を概観しながら、特定機能病院における退院支援の実際を報告したいと思います。